

別紙 2

審査の結果の要旨

提出者氏名：鳥居万由実

『「一九二〇年代～一九四〇年代の日本の詩における「人間ではないもの」の表象—動物・機械のイメージを中心に—』

本論文は二十世紀前半の日本語詩に頻出する「人間ではないもの」をめぐる表象に焦点を当て、それが急速な近代化を遂げた日本の歴史状況、とりわけ 1920 年代から 30 年代及び軍部台頭期における主体の危機の問題への詩的応答となっていたことを具体的な詩作品のテキスト分析を通して明らかにするものである。

独自の切り口から日本近代詩の展開の様相を提示し、主体の問題と絡めて論じているところに本論文の独自性があり、個別の詩人論、作品論にとどまることなく一貫した視座から詩的言語と同時代状況との関連を捉えていること、またそれによって個々の作品の新しい読みの可能性が開かれていることなどが高く評価された。例えば、大江満雄のように通常プロレタリア詩の枠で言及される詩人の作品における機械表象が単にイデオロギーの表明ではなく詩人の主体認識の問題と関わっていること、モダニズムの実験詩として括られてきた上田敏雄の作品が消費社会の広がりや主体の機能不全の問題との格闘の跡を示していること、女性詩人左川ちかの詩に登場する昆虫のイメージが当時の性規範から逸脱する主体の問題を照射しているといった分析である。

一方で、このように一定の分析軸から複数の詩人の創作の軌跡を論じることがその詩人の創作活動の全容を見えにくくしていること、それと関連して取り上げる作品の選択基準が曖昧になりがちであること、また分析の方向性が予め定められているために個別の作品のより豊かな読みの可能性を排除しているのではないかといった指摘があったが、このことは本論文の問題点というよりは今後さらに膨らませていくべき課題として了解された。他に、動物表象と機械表象の違いがどのように生じたのか、このように括ることの必然性が十分に論じられていない、論述の各所にやや大雑把な記述が見られる、先行研究に引っ張られすぎている部分があるなどといった指摘もあったが、いずれについても執筆による明快な応答及び説明があり、これらの点が本論文の総合的な価値をいささかも損なうものではないことが確認された。よって審査員全員一致のもとで、鳥居万由実氏の論文を合格とする結論に至った。本論文を博士（学術）の学位請求論文として合格と認める。

（主査：エリス俊子）